

第2回 SPARC Japan セミナー2019

「オープンサイエンスを支える研究者情報サービスとその展望」

概要説明

高久 雅生

(筑波大学)



当セミナーの企画概要

本日は、「オープンサイエンスを支える研究者情報サービスとその展望」というタイトルでセミナーを行います。研究者情報サービスで、研究者すなわち人に関する情報をいかにして管理し、いかにして発信し、いかにしてアピールするかということが恐らくメインのトピックになるだろうと思っています。

私自身の個人的なお話をしますと、前職時代からおよそ10年、このような研究者情報サービスの開発や研究に携わってきましたが、一つのキーワードは恐らく「多様性」です。研究者情報サービスはそれぞれの研究機関や大学に応じていろいろな特性を持っています。特に、さまざまなステークホルダーがいるということが何となく分かっています。近年の大学では研究推進や研究支援をしている部署、図書館、はたまた広報など、セクター横断的に研究者の情報を集め、それらを発信していかなければいけません。既に研究者情報サービスが単体の部署だけで成り立っているということはまずありません。

当然のことながらコンテンツも多様です。メインとなるのは研究者、人についての情報ですが、サイエンスのためには研究者が成果として生み出してきた業績、また大学等ですと授業や社会貢献活動についてもさまざまな情報を集め、それらの情報をまとめて発信していくことが極めて重要になっています。機関にいる研究者の規模感や研究者の領域、それぞれに応じて多様

な課題が出てきていると思います。これらはまさに基盤的なサービスであり、その研究機関がどのような発信をしたいかという戦略的な位置付けをきちんと取っているかということがわれわれにも問われてくるのです。

本日は、京都大学の青木さん、横浜国立大学の矢吹さん、沖縄科学技術大学院大学の上原さん、日本原子力研究開発機構の海老澤さんから多様なケーススタディ、事例をご報告いただきます。そういった多様性をきちんとわれわれの中で認知しながら、いろいろな取り組みが行われているのだということだけではなく、今後、その多様な取り組みを一般化しながら、より発信しやすい形を見ていきたいというのが基本的な企画の趣旨です。

セミナーの企画に当たって打ち合わせをしていた中で出てきたキーワードで気になったものが一つだけあります。「内と外」というキーワードです。いろいろな内にある、すなわち研究者の中にある情報、もしくは研究を行っている現場の内と外をつなぐ研究者情報サービスといった位置付けもあるでしょうし、研究機関と他の機関を連携させていくという話もあるでしょう。はたまたグローバルなことを考えますと、研究活動は国内に閉じておらず全世界的に行われていますので、ローカルとグローバルをつないでいくような全世界的な研究者情報サービスが求められており、そういった要件を満たすためにさまざまなことを行っていま

す。

今日は多様な研究者情報サービスの取り組みについてお話を聞きながら、今後それぞれの現場に持ち帰って、例えば大学の中でこういったサービスをどう活用していけばいいのか、今後どういった方向に向かうのかということを勉強させていただきたいと考えています。オープンサイエンスの方向に向けて、研究者情報サービスの戦略的な活用をいかに図っていくかということが求められていると思いますので、そういう議論につなげていければと思っています。